

2018年度 東北視察報告書

【メンバー】

網谷照世 代表

櫻田菜緒

望月大聖

【目次】

【学習会】2月車座会議

【視察先】フリースクールビーンズふくしま

【視察先】遊佐町少年議会

【視察先】遊佐町地域おこし協力隊

【視察先】すきまcafe

【学習会】2月車座会議

【講師】

- ・総合教育支援センター 指導主事 柳沼信之
- ・郡山市こども部こども未来課 青少年・放課後児童育成係 係長 伊藤惣市

【参加者】

こおりやま子ども若者ネットワークに所属する子ども若者活動団体の皆様

【要点】

- ・子ども若者育成支援推進法及び教育機会確保法の枠組みと現状
- ・上記2つの法律に則った郡山市の政策
- ・郡山市の子ども若者ネットワークの在り方

【内容】

・下記の「子ども・若者育成支援推進法」と「教育機会確保法」について郡山市子ども・若者ネットワークが同市の職員を講師として招いて学ぶ勉強会。

「子ども・若者育成支援推進法」-平成21年に施行された子ども・若者育成支援施策の枠組み作りや、困難を抱える子ども・若者支援のためのネットワークをつくることを目的としており、国及び地方公共団体の責務並びに施策の基本となる事項を定めた法律。

「教育機会確保法」-様々な理由で教育を受けられない状況にある子どもに対しても、教育を受ける機会を確保して、国や自治体で子どもや親を支援するための法律。従来のように不登校の生徒を学校へ戻すことを前提とするのではなく、多様な形で学んでいける社会を実現するために策定された。

- ・上記の法律の説明と郡山市としての取り組みを市の職員から説明し、参加者が意見を交換。
- ・ネットワークの代表である鈴木稜さんからの補足説明。

【質疑応答】

Q. 子ども・若者に関する一本化された相談窓口は、福島市にはあるけど郡山市にはない。どうして郡山市には作らないのか？

A. 郡山市では、教育委員会などで就労支援を行うなど、個別に対応している。教育委員会が中心となって、どう連携を進めていくかという段階なので、窓口設置のために動いていない。何年後に作るといった構想もない。

Q. 相談を受けたときに最終的にどこに持ち込めばいいのかわからない。行政の側がどういう構想を持っているのか知りたい。

A. ケースによって相談窓口を設けているので、そこで支援している。最終的な構想は今はない。

Q. そんなに行政が関わらなくてもいいと思う。NPOなど民間主体でいいのでは？

A. 個人的には歴史や経験のある団体の力を借りてやるのが望ましい。行政が出過ぎても良くないと思うが、関わってはいきたい。

【学んだこと・感想】

* 網谷

子ども・若者育成支援推進法、教育機会確保法の概要を知り、それに対する行政の施策や郡山市の若者支援に関わる人々の考えを聞くことができた。これらの法律はまだ世間にあまり普及しておらず、知らない人が多いが、実際に困難を抱える若者への理解と、困難を抱えてしまう根本原因を考えるために、これらの法律をさらに世間に浸透させることが必要だと思った。

子ども・若者育成支援推進法については、この法律の目的である「子ども・若者育成支援施策の総合的推進のための枠組み整備」と「社会生活を円滑に営む上での困難を有する子ども・若者を支援するためのネットワーク整備」を達成するための具体的な政策として、「子ども・若者に関する相談窓口の設置」が挙げられている点に疑問を感じた。相談窓口を設置することで、どこに相談したらいいかわからない方々へ適切な関係機関やNPO団体に繋げることができることはわかったが、悩みを抱えている人の大半は窓口に電話をかけよう、行政に頼ろう、とはならない気がする。窓口を設置することで解決できる問題は少ないと思う。

教育機会確保法については、施策が、ひきこもりの根本的解決よりも現在ひきこもりになってしまっている子どもたちへの対処に寄っている印象を受けた。現在の学校に何か問題があってひきこもりになってしまっていることが多いと思うが、学校を変えようという方向ではなく、一度学校外で支援をし、その後元いた学校に復帰させようとする姿勢に疑問を感じた。

法律やその施策等については勉強不十分、知識不足が過ぎるため、これからさらに理解を深めていきたいと思う。そして、現場の状況と政策をより近づける力になりたいと思う。

* 櫻田

これまで法律について学ぶ機会があまりなく今回の勉強会は少し難しかったが、どんなに良い法律に見えてもその運用の仕方によって全然結果が違うのだな、と思った。また、運用にあたってNPOなどの民間企業と行政での考え方の違いがあつて衝突が生まれたり、そこには現場で長年経験を積んできたNPO団体としての意見が根強くあつたりと学生団体である私たちが日ごろあまり触れることのない問題があつた。教育機会確保法について、政府の出す大綱が3年前に「家族主

義」の傾向を強めていること等、驚いた。若者の社会参画に関わる活動をしている私たちもこのような日本の政策には敏感であらねばならないと感じた。また、ネットワーク代表の鈴木さんのおっしゃっていた、民間が行政を責めるような空気になってしまったり様々な衝突はあるが、それを超えて話し合いながら共に力を合わせて子ども・若者を取り巻く状況を改善していきたい、という話が印象的だった。

*望月

これまで子ども若者支援に関する法律が、どんな形で整備されてどんな取り組みがなされているのか知る機会がなかったので、良い経験だったと思う。行政の人たちが、子どもや若者支援の在り方をどう捉えていて、それにどう向き合っていくのか考えさせられた。自分たちの立場からすると、もっと現場というか支援される人たち個人を見てほしいなと思った。社会を変えることの近道は行政との協力だと思うので、どう折り合いをつけながら真の意味での子ども若者支援ができるのか考えるきっかけとなった。また、こおりやま子ども若者ネットワークなどといった横の繋がりを意識し、情報や知識の共有を行って、自分達の位置づけをしていくことの大切さを認識できた。勉強会を通じて、自分たちが子ども、若者はもちろん、どのように行政、市民団体とも関わっていくのか改めて考えさせられた。

【視察先】 フリースクールビーンズふくしま

【場所】

〒960-8164

福島県福島市八木田中島，八木田字中島 1 0 6 - 1

電話：024-529-5184

Mail: info-freeschool@beans-fukushima.or.jp

HP: <http://fs.beans-fukushima.or.jp/>

Twitter: @beans_fukushima

Facebook: <https://m.facebook.com/beans.fukushima/>

【日時】2019/2/27(水)

【視察メンバー】網谷、櫻田、望月

【協力者】フリースクールビーンズふくしまスタッフ 佐々木純

Mail: j-sasaki@beans-fukushima.or.jp

【視察目的】

- ・子どもたちが安心安全でいられる居場所をどのようにつくっているのかを知ること、自分の活動に活かす。
- ・フリースクールビーンズふくしまで働いている方々の、日々感じていることや、若者支援に対する思いを知り、学ぶ。

- ・実際に利用している子どもたちと触れ合うことによって、ありのままにいられる居場所とは何かを探す。

【施設概要】

- ・子どもたちが、自ら、望む姿で、安心して過ごせる居場所です。仲間と共に、活動や企画を通して、集団づくり・仲間づくりができます。ここにしかない日々の生活や、出会い、体験や経験、発見の中で、学びを体感できます。
- ・ここには「フリースクールビーンズふくしま」にしかないユニークなこともたくさんあります。
- ・これまで体験してきたことにとらわれず、自分らしさを大切にされる居場所、自己決定の自由ー子どもの権利が守られる、子どもと主役の居場所です。
- ・スタッフと、仲間と、学校、地域の皆様と共に、育ちあいながら、それぞれが本当に望む形での自立の準備を楽しんでしていただけます。（HPより引用）
- ・ミッション「教育、労働、福祉との接続機会における社会からの孤立問題を解決する」ビジョン「生きにくさを抱える子ども若者が自ら望む姿でつながることができる社会をつくる」
- ・決まった時間割はなく、みんなでなにをしたいか話し合いながら毎週プログラムを作る。いつ来てもいいし、いつ帰っても良い。
- ・電話での面接後、5回まで無料体験ができる。
- ・入会金¥10,000、〈定額利用コース〉月額利用料¥30,000、月額教材費¥1,000〈利用回数コース〉月額利用料¥10,000、1日利用料¥1,500、月額教材費¥1,00

【事業内容】

- ・週ミーティング…子どもたちが主体となって行うミーティング。次週の予定（何をするか、企画等）を決めたり、フリースクール内での約束事を確認したり、フリースクールの運営の役割を分担したり、ミーティングの方法を子どもたちが考えたりする。
- ・企画…子どもたちが自分で考えたことをやる。（例：みんなでランチ作り、体育館でスポーツ、公園で思いっきり遊ぶ、自分の好きなものを講座で紹介等）
- ・不定期イベント（例：宅配花屋”Berry Beans”、資源回収、進路フェスタやオープンスクールの見学、子どもとスタッフの面談、オープンハウス）
- ・親の会、おやまめの会の開催…前者は、不登校の子供を持つ親同士の交流会、後者は、フリースクールビーンズふくしまに通う子どもを持つ親への情報提供と交流の場。

【質疑応答】

- Q1. 週ミーティングの司会者はどうやって決めているか。
A1. くじ引き。ミーティングの役割を分担してくじ引きで決めている。
- Q2. それに対して反発する子はいるか。

A2. 「今日司会やりたくない」「あ、じゃあ俺やるよー」というように代わったりする。司会をやりたい子は結構多い。

Q. どんな層の子どもが来るのか。(入会金や月々の費用がやや高いと感じる)

A. 高いよね～(笑)やはり貧困家庭は繋がりづらい。そこが課題。

Q. 入会時は、親が子を連れてくることが多いのか。

A. 親からつながるケースが多い。子供たちが自分からネットなどで見つけて動くことは稀。フリースクールへの見学の際は親御さんが一緒にきてもらうことを前提にしている。そのため、通っている子は親とのコミュニケーションが取れている場合が多い。

Q. 学校に通いながらフリースクールにも通う子はいるか。

A. もちろんいる。午前は学校にいて、午後はフリースクールにいるという子もいるし、フリースクールだけの子もいる。月に1回、週に1回だけ担任の先生に顔を見せる子もいる。

Q. 子どもたちの間で、フリースクールに通っている子はまわりからどう思われているのか。どういう空気感なのか。

A. スタッフというか大人の感覚でいうと、学校に行こうがフリースクールに来ようが、その子が「ここが安心できるな」とか「ここで学びたいな」と思える場であるならいいじゃんと思うが、やはりフリースクールに来たての子からすれば、「自分は学校にはいけないな、だからここに来よう」というように、学校の代わりとして来ている子は多い。慣れてくると、学校だろうがなんだろうが「ここに来たいから来る」ようになってくる。最初はフリースクールに来るときに、帽子やマスクで顔を隠すような子も多いが、長年通っていると、そのようなことも減ってくる。学校に行きたいから行く、フリースクールに行きたいからフリースクールに行く、そういうことが当たり前にならないと、子どもたちの中にはなかなか入っていかないんだろうなあとと思う。当たり前を変えていきたいと思う。

Q. ビーンズふくしまのビジョンについて

A. スタッフの心の中に共通する思いとしてはあったと思うが、最初から言語化されていたビジョン・ミッションはなく、ビジョン・ミッションから色々な活動が生まれたわけではない。事業を進めていく中で自分たちは何がやりたいのか考えると、やりたいことはひとつではなくたくさんあるねというところで、言語化したもの。震災があって避難しながら学校に行ってる子もいるし、不登校だけど震災の被害を受けなかった子もいるし、何をサポートしたいんだろうという話になり、生きにくさという言葉が出てきた。生きにくさは自分はもちろん、誰しもが抱えているもので、そのときに社会と繋がれないっていう人のサポートをしていきたいとなった。だからミッションに社会からの孤立問題解消っていう文言を入れた。行ったり戻ったりだけどそのやりとりが大事だと思う。

Q. 卒業した後にまたビーンズに戻ってきたり、他の事業につなげたりとかはありますか。

A. あります。フリースクールは20歳までしかいられないので、次のステップが見つからずに20歳を迎えてしまった子に関しては、ふくしま若者サポートステーションや、ユースプレイス、すきまカフェといった、フリースクール以外のビーンズの事業に繋げることがある。フリースクール以外の事業のスタッフも子どもたちのことはよく知っているので、他のところへ行っても、その人にとっての居場所となりうる。

Q. 現在の学校教育についてどのようなことを感じているか。

A. 学校だけが教育の現場になっているところに違和感を感じる。色々なところに教育の場があり、子どもたちが自由に選択できるといいなと思う。教育の場として、家、地域、学校などを選べるのが当たり前になればいいなと思う。

Q. 子どもが不登校になってしまう大元の原因は何だと思うか。

A. 人それぞれ原因はある。なんらかのトラブルだったり、学校の雰囲気や学校の建物自体が合わなかったり。

Q. ビーンズを卒業しても義務教育を受けたことにはならないのか。

A. 出席日数にカウントできるかどうかは、その子が在籍している学校の校長の判断による。福島市内ではあまり認定されていないが、隣の市の伊達や二本松では、認めている学校がある。しかし、フリースクールに通う子どもたちにフリースクールでの出席日数を学校の出席日数としてカウントしてほしいかどうかアンケートを取ったら、出席日数は持ち込まないでほしいという意見があった。出席日数を数えてしまうと、学校と同じようにフリースクールに通わなければならないという気持ちになって行きづらくなってしまう。保護者の方にも同じようなアンケートを取ると、まだフリースクールとつながっていなかったり、通い始めて間もなかったりする子の保護者の多くは、出席日数としてカウントすることをありがたいが、長年通っている子の保護者には、フリースクールは子どもたちが自分の意思で行っている場所だから、来なきゃいけないとなると、それは居場所ではなくなってしまうから、ちょっとな子どもたちと同じ理由でカウントという意見があった。

Q. 何歳から何歳まで入会できるのか。何歳の子が多いのか。

A. 6歳から20歳まで。年齢が高くなるにつれて周りにいる年下の子たちと合わないと感じるようになる人が多いため、年齢層的には小・中学生が多い。

Q. 若者支援をすることで社会にどんな良い影響があると思うか。

A. 社会まで考えることはあまりないが、主体的に自分のやりたいことを見つけられる、探せる、挑戦できる人が増えていくのでは。そして、自分の周りがおかし

いと感じることや、自分はこうしたいという思いを持ち、表現できる人が増えるのではないか。

Q. 何を目標として若者支援を行っているか。

A. 一人前になった子どもと一緒に酒を飲むとかかなあ。その子が自分のお金でお酒を飲めるようになる、成長と一緒に喜び合えるということが身近な目標。大それた社会を変えるぞ！みたいなものはあまりないけど、その子が自分らしく自分の人生を歩んでいますという話を聞けたらそれに尽きるかな。

Q. ビーンズを卒業した子は学校に行けるようになるのか。

A. 中には学校に行く子もいるし、学校はもういいやって就職する子もいる。学校に行けるようになることは前提ではない。

Q. 不登校の子どもを持つ親へのアプローチの仕方。

A. 親の会やおやまめの会を実施。

Q. 現代の子ども・若者はどんなところに生きにくさを感じていると思うか。

A. 「みんなが学校に行くのが当たり前だ」「みんな同じことをしたほうがいいよ」とか…個性を大事にというわりに、学校教育は変わらない。スマホとかインターネットとかが普及してきて、それぞれ好きなものを選べる時代なのに、「みんな一緒に」「みんな統一に」というのが生きにくいところではないか。

Q. 事業を行っていくうえでの課題は何か。

A. フリースクールを出た後の次のステップを見つけられない人への対応。フリースクールでは生き生き活動できるけど、アルバイトには行けない人へどのぐらい後押しをすればいいのか。背中を押してあげたいが本人は怖いって言ってるし…迷う。後押しの程度やタイミングが難しい。

Q. 教材とはどんな物を使っているのか。また、どのようにして使っているのか。なぜそれを選んだのか。

A. 教材は子ども自身に持ってきてもらうものと、フリースクール側が用意したものを使用している。

Q. 勉強をどのように見ているか。フリースクールでは、子どもが勉強をしたいという気持ちになったときに勉強する、子どもの意思を尊重する、とおっしゃっていたが、これからの道の選択肢を広げるためにはある程度学力が必要になってくることがあるのでは。子どもに勉強を無理強いしたくはないが、勉強してこなかったことが原因で、「ああもうこの道はない」となってしまうこともあるのでは。

A. 情報は伝えたいなと思っている。「早めに勉強をすれば選択肢は広がるよ」という情報は伝えつつ、強要はしない。そこを選ぶかどうかは子ども次第なので、

冷たい言い方をすれば、結局勉強をせずに選択肢が狭くなったとしても本人が決めたことだし、選択肢の狭くなってしまったところで

Q. 子どもと関わる上で大切にしていることは何か。

A. 子どもが自己決定をすること。本人の意思尊重。自分で決定しない人生を歩むと、その先に自分が何をしたいのかわからなくなる。

Q. どういう社会だと（子ども若者が）安心して自分らしく過ごせるか。どうしたらそういう社会を作れると思うか。

A. だれかがこうしようって言ったら作れるわけでもない。思いをつなぎ合っていく、諦めないで発信していくうちに、つながったりとか思いが浸透したりとかしていくと思う。身近な人から伝えていくことは大事。発言力のある人が何か言ってくれたらいいのになあと思う。

【学んだこと・感想】

* 網谷

担当してくださった佐々木さんのお話を聞いて、佐々木さんが子供たちに正面から向き合い、このフリースクールビーンズふくしまという場所をとっても大切にしていることが伝わってきた。

現在の社会環境では、学校に通わなくなってしまった子どもは、親以外と関わる機会がなくなり、居場所が家にしかなくなってしまふ。居場所が固定化するというのは、視野や行動範囲を狭めてしまうということであり、その子の人生の可能性や豊かさを奪ってしまうことになる。フリースクールは学校以外の居場所を提供し、そういう子どもたちの選択肢を広げるために重要なものであるということがわかった。

また、ビーンズふくしまの、「子どもを学校に戻そうとしない姿勢」に感銘を受けた。フリースクールと聞くと、学校に行けなくなってしまった子どもを学校に復帰させることを目的としているようなイメージがあったが、全くそうではなかった。学校に行けないことはなにも悪いことではなく、そもそも子どもたちの教育機関として学校という一つの場しかないことがよくないのでは、という佐々木さんの言葉にとっても共感した。もっと様々な体験学習の場があって、自分に合った学習の場を自分で選べたら素敵だなと思った。

しかし、学校に行かない子どもを持つ保護者は、自分の子供が学校に行けないことを心配し、「なんで他の子は学校に馴染めるのに、うちの子はできないのだろう」「どうしてみんなができることがうちの子にはできないのだろう」と子どもを責めてしまうことが多いように思う。実際に、今期の「もうひとつの放課後探しプロジェクト」参加者の高校生の子の保護者に、「うちの子は全然学校に行っていない」「行くように言ってくれ」と言われたことがある。私は学校は行か

なくてもいいものだという自分の考えを伝えることができなかった。そういった考えを持つ保護者の方の理解を得ることも今後の課題だと思う。

ビーンズでは、子どもたちの自主性や自己決定が重んじられていて、その点にもいいなと思った。定期的に行われる、みんなでやりたいことを決めるミーティングでは、役割分担をし、自分たちでミーティングを進行しており、他にも、勉強をするしないというのも自分で決め、職員は勉強を強要しないそうだ。なんでも決められてしまう学校よりもよっぽどいいなと思った。佐々木さんは、自分で選択をしない人生を歩むと、後々自分がなにをしたいのかがわからなくなるということをおっしゃっており、自己決定することの大切さが改めて感じられた。

佐々木さんのお話の後に、実際にフリースクールに来ている子どもたちの様子を見させていただいた。4, 5人の子どもたちはみんなで机を囲んでカードゲームをしている最中で、私たち視察組はそこにほんの少しの間だったが、そこに混ぜてもらい、一緒に遊んだ。子どもたちは私たちのせいで少し緊張は見えたと、ちらほら笑顔も見せてくれて、純粋に楽しんでた。このフリースクールが、自分たちの居場所として安心できる場所であることが伺えた。もっと沢山おしゃべりがしたかった。安心できる居場所作りの大切さを感じた。

* 櫻田

ビーンズ福島は地域の人たちが中心となって始まり、そこから若者の居場所支援、就労支援、子ども食堂、と20近い事業を展開していることがすごく興味深いし、すごいと実感した。市民がきっかけでおきた動きがここまで広がりを持つんだ！と感動したし、若者やその家族が必要とするものをどんどん作っていく、という流れの広がり方だったのでその地域で若者一人ひとりのニーズが活動の存在理由で若者が本当に必要としている支援なんだろう、と思った。ただ、利用料金がやはり高いと感じて、施設の方に料金について聞くと向こう苦い顔をしていてこちらもなんだかやりきれない思いになった。

嬉しかったのは来ている子たちと少し関わられたこと！すごくひょうきんな子や恥ずかしそうにしている子、割と普通のテンションで話しかけてくれる子、いろんな子がいたけどなにかそれぞれビーンズで楽しく過ごせている感じが伝わってきた。いきなり現れた私たちへの反応には色々なものがあつたが、彼ら同士はみんな仲がよさそうに見えた。

視察の最後に3年前までビーンズ福島の職員をされており、今はフリーで若者に関わる活動を続けている鈴木陵さんにお話を伺うことができた。その際に聞いた話が多分この視察で私が最も印象的だったことなのでここに書いておく。鈴木さんはある男の子との出会いをきっかけにビーンズ福島を離れることになったとそう。職員時代に、フリースクールを利用している子たちと近くのコンビニに行くことになって一人の男の子が店の外に立っているのが最初はあ〜不登校してんだな、と思っていた。何度も見かけるのである日、なにしてるん？と声をかけると「ここにこれば（自分と同じ不登校の）友達に会えるから」と答えたそうで、この時鈴木さんは

*望月

最初フリースクールに持っていたイメージと大きく違っていたことに驚いた。来ている子ども達によって捉え方は様々だと思うが、学校とも家とも違うもうひとつの居場所の在り方なのだと思います。子ども本人の意思を尊重し、学校に戻らなくてはいけないなど、まわりからの押し付けだけではなく自分なりの生き方をしてもいいと思える場所の必要性を改めて感じた。個人的に印象に残っている事柄は、フリースクールに通う子どもと保護者を対象に行われたアンケートだった。アンケートの内容は、フリースクールの出席日数を学校の出席日数に含めて欲しいかというものだった。結果として、子ども達だけでなく、長く通わせている保護者も、そのような取り組みはしないでほしいということだった。ひとつの居場所は、それ自体に価値があるのであって、決して第二の学校というだけではないことがよく理解できた。フリースクールを始めとした取り組みが、子どもたち一人ひとりのために選択肢を広げ、自分なりの人生を歩む第一歩として大きな役割を果たしていると感じた。

【MEMO】

- ・来てる子は明るい子が多い。頑張りすぎてしんどくなっちゃった子とか
- ・集団の中で育ち合う
- ・一対一の対談→心の相談室、フリースクールと合わさって利用できる
- ・コミュニケーション（ユースプレイス15-39さい）
- ・1子供達が自ら望む姿で安心して過ごせる地域の中で、、、自の自分が出せる、ここにもいいんだと思える安心できる場所、1つには決められない居場所が感じられない子供は自己否定しがちな子が多い、学校に行くのが当たり前というのが通念、フリースクールは地域の安心できる場所の一つ、いろんな選択肢の一つ 2その子らしく社会とつながる、人とつながること 3ここでしかできない体験経験、多様な学び びーんずでのまなびのとらえかた自分自身ことを認める力m想いを形にする力、失敗した時に乗り越える力、自己決定を大切にする
- ・基本理念めっちゃYECと通じるところある
- ・不登校の考え方→学校へ行く行かないフリースクールへ行く行かないは個人の自由でこっちがあとおししたりとかはしない。本人の気持ちのよりrそう。不登校の原因をさぐのではなくこれからどうするかをともに考える、自分でもなんで学校にいけないのかわからないことが多い。不登校は病気じゃないので治療してるわけではない。学校に行っていないことが問題なのではなく、その子にとって安心できる場所がないことが問題。
- ・学習…本人のやりたいという意志のもとでおこなう。安心感のある場所で、学習する目的探し、きっかけづくり、スタディパーティ、場つくと結構やりたいっていつてくる子おおい、安心と自信を育てられる環境
- ・ふりー…がっこうにとらわれない、子供の自己選択を大事にする、**フリースクールは小さな社会、社会経験**
- ・企業とのつながり→地域のつながり、仕事体験
- ・できたのつみかさね

- ・ミーティングは生き物
- ・役割分担
- ・自分で決めない人生あゆんできたなら、その先なにしたいのわかんなくなる

【写真】



・ 外観



・ 部屋の様子（ここで普段は学校の宿題などをしている）



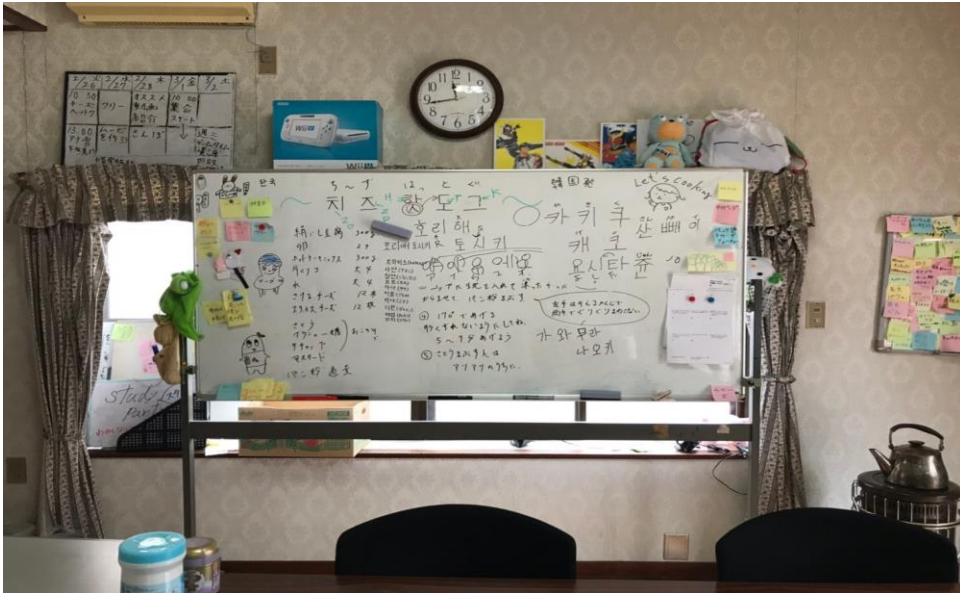
- 部屋の様子



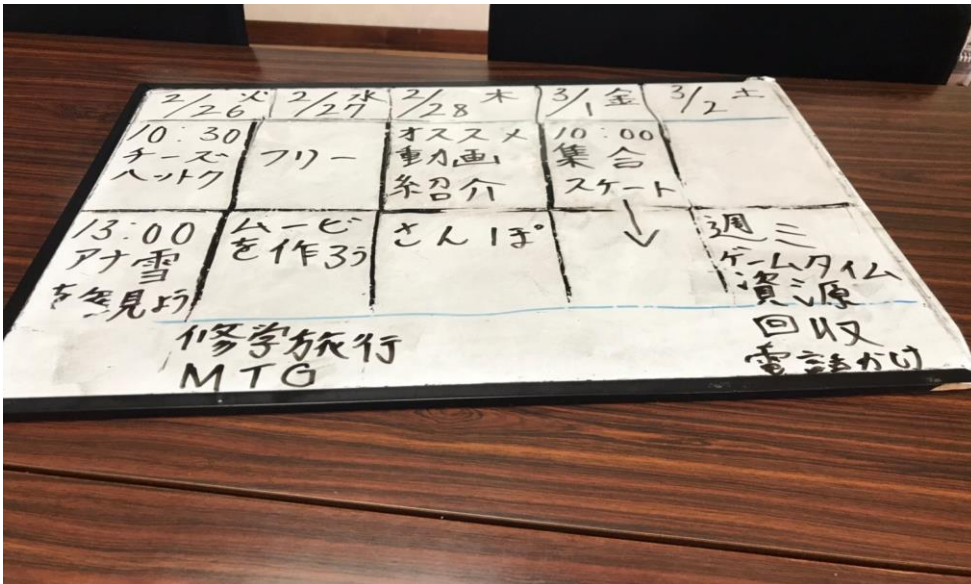
- 部屋に貼ってあった写真



- 部屋に貼ってあった写真



- 自由に使えるホワイトボード(子ども達がミーティングなどに使用している)



- 週の予定表
- 子どもたちが決めたプログラムが組まれている

【視察先】 遊佐町少年議会

【場所】

〒999-8301

山形県飽海郡遊佐町遊佐舞鶴2 1 1

電話：0234-72-3311

Mail: kikaku@town.yuza.lg.jp

HP: <http://www.town.yuza.yamagata.jp/education/learning/>

【日時】 2019/2/27(水)

【視察メンバー】 網谷、櫻田、望月

【協力者】 山形県遊佐町役場企画課企画係 本間 裕行

平成30年度 第16期遊佐町少年議会議員 酒田西高校3年 白崎志織

平成30年度 第16期遊佐町少年議会議員 酒田光陵高校3年 鈴木麻

優子

【視察目的】

- ・若者自身が政策提言を行い、自治体と協力できる構造について学ぶ
- ・何が若者の社会参画の原動力になっているか知る
- ・社会参画をしている若者が地域にとってどんな存在か知る
- ・社会参画をしている若者の生の声を聴く

【事業内容】

遊佐町では、2003年から若者の力によるまちづくりを目指し、遊佐町在住・在学の中学生と高校生の立候補者の中から「少年町長」と「少年議員」を直接選挙で選り少年議会を開催している。少年町長と少年議員は、遊佐町の若者の代表として「中学生・高校生の政策」を議論し決めている。町では、その政策を尊重し実現を図り、また少年町長と少年議員は、自分達の決めた政策を実現する。また、議員以外の若者の意見も反映されるよう、アンケートで自分の意見や政策を提言できる仕組みになっている。専用メールアドレスも用意されており、議員だけでなく若者全体の声を幅広く集められるような仕組みが整えられている。実際には、町のイメージキャラクターや特産品の開発から、要望書・陳情書の提出まで様々な政策提言を行っている。

平成30年度第16期少年議会活動内容

6月10日 当選証書付与式及び第1回少年議会

6月23日 第1回全員協議会

7月8日 第2回全員協議会

7月29日 第3回全員協議会

8月14日 町民盆踊り大会

8月17日 第2回少年議会

9月1日 第26回奥の細道鳥海ツーデーマーチ
9月15日 視察研修
10月8日 神鹿角切祭、第4回全員協議会
10月14日 第5回全員協議会
10月22日 ダイヤ改正のための要望書提出
11月10日 第6回全員協議会
11月23日～25日 スタディスペース

【質疑応答】

Q. いつから参加しましたか？

A1. 中学校3年生から計3回参加しました。

A2. 高校2年生から2回です。

Q. なぜ少年議会に参加しようと思ったのですか？

A1. 通っていた中学校に役場の方が説明にきて知った。遊佐が好きで遊佐のこともっと知りたいもっと広めたいと思ったから。中学生なのに町の運営にかかわれるのがすごいと思ったから。内申点を稼ぎたいと思ったから。

A2. 中学生の時から、学級委員の仕事、人前に出る仕事が好きだった。高校に入ってから忙しくてできてなかったけど、役場の方が毎回来てくれていた。2年生になって少し落ち着いたのでやってみようと思った。なんとなくで始めた。自分は卒業後、遊佐に残るつもりはなかった。でも18年住んでいた場所だし、せっかくだから遊佐の素敵などところを見つけないかと思った。

Q. 実際参加してみて感じたことは何ですか？

A. もともと遊佐が好きではあったが、参加してみるともっと好きになった。遊佐のいいところも悪いところも見えてくる。

Q. 議員さん同士は仲が良いですか？

A. みんな学校も年齢もばらばらだけど、上下関係がほとんどなくて、最初参加したときはこんな感じでいいの？って思ったくらいです。それがいいところだと思う。

Q. 議員さんは何年も続ける人が多いですか？

A. 続ける人が多いです。今期も半分くらいは経験者ですね。楽しいからもう一回やってみようかなって思えます。自分たちの予定に合わせて計画を組んでくださるので、無理のない範囲で参加できます。担当の人も面白くて優しいです。

Q. 議会はどんな様子ですか？

A. 年3回行われてます。最初は自分のやりたいことを町長さんたちの前で発表して、2回目に経過報告をして、最後に振り返りみたいな形でやっています。難しい

報告をしなくてはいけないと思っていたけど、自分の思ったことを言うだけでそこまで難しくなかったです。

Q. 少年議会は必要だと思いますか？またほかの地域でもやった方がいいと思いますか？

A. あったほうが良いと思う。自分は酒田の高校に通っているけど、議員の活動を通して気づけることもあるし、周りにも自分の市に少年議会みたいなものがあるといいなって言っている人がいる。絶対ではないけど、あったほうが充実するのかなとは思っている。将来、まちを担っていくのが私たち若者だと思う。だから若者が意見を発信できる場があったらいいなって思う。

Q. 議員を務めてみてうれしかったこと悲しかったことはありますか？

A1. まちのパンフレットを作っていて、町長さんや担当の人から「あのパンフレットいいね」とか「ほかのところに持っていくといつも喜んでもらえるよ」っていわれるとうれしいです。意見を言ったけど予算の関係などで通らなかったことは仕方ないけど悲しいです。

A2. 活動で遊佐町のキャラクターのベンチを作ったんですけど、そのPRがすごくいいものだとは思っていなかった。だけど友達が遊佐に遊びに来た時に、写真を撮って送ってくれて広まっているんだなって思えたことがうれしかったです。母子手帳のデザインに、遊佐町のキャラクターを使ってみたらどうだろうという提案をしたんですけど、お母さんたちにアンケートを取ってバツサリ切られたのが悲しかったですね。現実を知るのも大事ななって思ったけどやっぱり悲しかったです。

Q. 遊佐町についてどう思いますか？

A. 好きです。自然豊かで、季節ごとにいろいろな顔を見せてくれるので面白い。景色がすごく好き。

Q. 議員になってから変わったなって思うことはありますか？

A1. ちゃんといろいろ考えてからしゃべるようになった。今までは知らないからで片づけてたけど、実際こうしたらどうなるんだろうとか、これは違うかなって考えて判断できるようになりました。

A2. 人の前で自分の意見をちゃんと言えるようになった。人前でしゃべるのがあまり苦にならなくなった。より人としゃべれるようになったかなって思う。

Q. 身の回りや社会で、「もっとこうなったらいいのにな」「こうしてみたいな」と思うことはありますか？

A1. もっといろんな人が大学とかに進学できるといいなって思う。お金とか親がだめっていうからとかじゃなくてもっとその人の意見を聞いてほしいなって思う。

A2. もっと若者の意見を発信できる場所があったらいいなと思う。

Q. もし少年議会がなかったら遊佐町は今とどう違うと思いますか？

A. ただの田舎だからって言ってこんなに好きになってなかったと思う。電車もないし、遊ぶところも少ないけど、自分だけじゃなくて周りも、議員の活動を通じて遊佐町の良さを知れたと思う。ただ都会に出て行っちゃっただけじゃないと思う。

A. 良さを見いだせなかったと思う。帰ってこなくなっちゃっくんじゃないかなって思う。

Q. 遊佐に帰ってきたいと思う？

A. 仕事があれば帰ってきたいです。（2人とも）

【学んだこと・感想】

* 網谷

白崎さんも、鈴木さんも、本当に遊佐が好きで驚いた。2人だけではなく、遊佐町の若者たちにとってアンケート結果でも、やはり遊佐が好きな人が9割程で、こんなにも自分の住んでいるところが好きな人が多いことが不思議に思えた。私の地元(名古屋)でアンケートを取ったら、きっと全く違う結果が見られるだろうと思う。2人が遊佐を好きな理由として、景色が良いことを一番にあげていたが、遊佐町少年議会についてのインタビューをしていて、理由はそれだけではないと感じた。遊佐では、若者の意見や若者自身が、価値のあるものとして大切にされていることがその大きな要因での1つではないだろうか。実際に若者が大切にされている例として少年議会があげられる。少年議会で話し合われた内容は、政策提言として行政に確実に届けられ、思案される。若者の声が届き、社会に反映できる社会構造ができている点が遊佐のいいところだと思った。また、若者の声に耳を傾けてくれる人がいるということも少年議会を通して若者自身ができることができ、主体的に社会に関わっていこうという意欲を高めることに繋がっており、若者の社会への参画を高めることができると感じた。

今期の少年議会は終わってしまっていて、実際に議論している場は見ることができなかったが、年に3回ある大きな会議の映像を見せていただいた。思っていたよりも本格的な、国会のような形と雰囲気で行われていたことに驚いた。

* 櫻田

二人が負担に思うことなく活動に関わっていて、何よりも遊佐の町が大好きだということが話していてすごく伝わってきた。私も沖縄の地元が大好きなので好きな地元でまちづくりに関われる二人が純粋に羨ましい部分もあった。二人に会う前は、高校生であんまり歳は変わらないとはいえいきなり来られて緊張させてしまうかな、とか学生が授業の感想に書くみたいなのうわべの会話で終わってしまったらどうしよう、とか心配していたが心配無用だった。町の好きなところ、ち

よっと困るところ（電車がすくなくなったり、）を改善したりPRする活動のことを
すごく楽しそうに話したり、

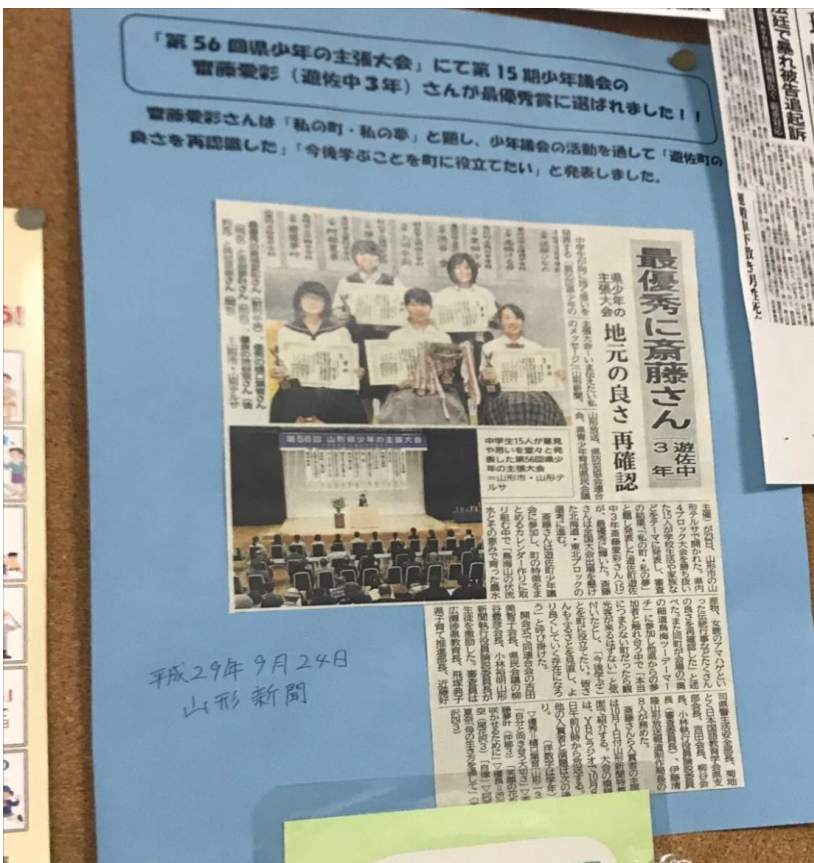
*望月

実際に少年議員の方とお会いして、遊佐町のことがすごく好きだと言うことが
伝わってきた。議員は一回で終わらず何度もやっている子が多いと聞いて驚い
た。自分たちでやっていることが、周りに認められることが大きな原動力になっ
ていたのだと思う。自分たちの意見が、政治の場で反映され目に見える形で現れ
れば、自分たちが社会を作っていくという自信につながると思った。無理矢理
やらせずに、立候補してやっているのが理想的だと思った。その結果として、遊
佐町が好きということだけでなく実際に戻って来たいという状態になっていた。
実際に遊佐町議会に参加し、議長や政策提言などを行うことにより、政治がどう
いうものなのか、学校で教わることよりもリアルに感じ、学べていたように感じ
た。行政が予算を出してくれていることも、信頼されているように感じるのだと
思った。自分たち若者の意見を、もっと出していきたいという言葉がたびたび出
てきて驚かされた。自分が高校生の時に果たしてこんなことが言えたかなと思っ
てしまった。良さを教えるのではなく自分たちで発見していくことが単純に楽し
そうで、理想の形なのかなと思った。これからもこのような活動を続けてほしい
と思ったし、様々な地域で取り入れられれば、若者の考え方や価値観が置き去り
にされることなく、社会参画できると思った。地域づくりをしていく中で、大人
が子ども・若者を巻き込んでいくのではなく、子ども・若者自らが地域の魅力を
発信し、新たに魅力を作っていくことが理想だと感じた。

【写真】



・遊佐町生涯学習センターの入り口付近



・少年議会の議員が県の主張大会で賞を取った新聞記事

【視察先】 遊佐町地域おこし協力隊

【場所】

〒999-8301

山形県飽海郡遊佐町遊佐舞鶴2 1 1

遊佐町役場 企画課 企画係

TEL: 0234-72-4523

FAX: 0234-72-3315

Mail: kikaku@town.yuza.yamagata.jp

HP: <http://www.town.yuza.yamagata.jp/ou/kikaku/kikaku/pf0507141411/>

【日時】 2019/2/27(水)

【視察メンバー】 網谷、櫻田、望月

【協力者】 遊佐町協力隊 地域づくり担当 坂部春奈

【視察目的】

・地域づくりに従事している方の地域に対するイメージや、地域おこしを仕事にする理由、地域に対する思い等を聞くことによって、YECの活動をより地域に根付いたものにするためのヒントを得る。

【事業内容】

遊佐町役場の中にある、遊佐地域協議会を拠点に活動している。人口減少が続く遊佐町において、地域の様々な人との交流を通じて町の魅力や知識や情報を共有・再確認し、そのことを外部に発信するといった活動を手掛けている。町のことを町の人たちと一緒に課題を探し、悩み、共にまちづくりを進めている。

【質疑応答】

Q. どこから遊佐町へ来られましたか？

A. 山形市出身でもともと遊佐町は知っていた。大学時代は東京で過ごして、一年間働いてUターンという形で遊佐へ来ました。ゲストハウスなどの起業も考えています。

Q. 遊佐町のことをどう思いますか？

A. 最初に連れてきてもらった時からすごく魅力的だと感じた。山形県内でも内陸部と海沿いで、いろいろと違う部分があって面白い。遊佐の人たちは、面倒見がよく、受け入れられてるような感じを受けた。

Q. 坂部さんは地元が遊佐ではないのになぜ遊佐での地域おこしに携わろうと決めたのか。

A. 山形に帰ってきたのは4年前。もともとファッションが好きで、大学時代もずっとアパレル系のアルバイトをして、早く社会に出たいと思っていた。だけど、働

いていて体を壊してしまい、つくり手に興味を持ち始めた。山形に帰って、様々な仕事をしているうちに、山形県の魅力に触れて、実は魅力的な県なんだと思うようになった。その延長ではないが遊佐で地域おこしをしながら、山形の産業と繋がれたらいいなと思う。

Q. 地域おこしに携わる中でやりがいを感じるのはどんなときか。

A. まだ遊佐にきてから半年で、自分で考えなければならないことが多く、不慣れなことが多い。どうやったら町を盛り上げられるか考えて、企画を組むのが慣れていないので、大変。だけど、いろいろな人たちと一緒にいろいろなことをやるのが楽しい。

Q. 今は何をやっていますか？

A. 今は、昔の遊佐町の地図を作るという自分の前任者の企画を引き継いでやっているのと、馬の糞まんじゅうという商品をどういう風に安定して売り出せるかを考えている。

Q. 地域の伝統など少し閉じられている部分もあると思う。地域おこし協力隊としてどのようにその中に入っていくんですか？

A. 私もちからコミュニティの中に入っていくのは初めてなので、難しいと思っていた。しかし、先輩の協力隊の方たち自身が、自分の町での暮らしを楽しんでいて、そのことが秘訣なのかなと思う。あとは、聴くということも大事だと思う。知らないことを自分だけで悩むのではなく、まず地域を知りいろいろなことを聴くことが、人と繋がる第一歩だと思っている。町づくり協議会は、地域の方たちの交流の場となっており、毎日たくさんの方が来る。小さい町だから、人と関わろうとしないと話す機会がなくなってくる。自分たちがパイプ役になっているのかなと思う。

Q. 人と人との繋がりはどうして大切だと思いますか？

A. 都会だとお金があれば一人で生きていけるし、寂しくない。だけど田舎に来ると、何かあったときに助け合わないと生きていけないと感じる。ここでは対物ではなく、対人が大事なんだと思う。東京にいたときは自分の人としての感情を押し殺していたが、遊佐にきてから感情を出すようになった。ここでは、嫌なことや苦しいことも人と関わることで解消できる。一人じゃできないことはいっぱいあって、みんなで協力すれば自分一人よりもずっと大きなものになる可能性がある。そのために人との繋がり、大事だと思う。自分が知らなかったことを知ってる人がたくさんいて、人と繋がっていれば知識も価値観も広がって行くと思う。

Q. 坂部さんが悩んでいることやモヤモヤはなにかありますか？

A. 人と繋がるのがテーマになっている。SNSなどで自分のことを発信することが大事だと思う。人との直接のコミュニケーションも大事だが、発信しないとわか

らないことがたくさんあって、遠くいるたくさんの人にそれを届けるのは大事だけど苦手なのでそのことを悩んでいる。良いと思えることでも、そのことを知らなければ誰も来ないし、伝えられない。どんな言葉でどのタイミングで発信するかについて悩んでいる。

質問するのが上手になりたい。引き出せるような質問を投げかけたいと思う。そこにいる人にどこまで切り込めるのかなど、距離感が難しい。

Q. 坂部さんが大切にしていることはなにか。

A. なるべく、自分が絶対だって思い込まないこと。正しいことはあると思うけど、社会に出ると矛盾がいっぱいある。その矛盾は、自分がこうだ！と思い込むと周りに受け入れられなくて苦しくなる。その矛盾の裏には何かしら理由があって、それを考えるようにする。この人はおかしいって思うことはあるけど、その人の中では正当なものだから自分で思い込まずに、相手のことを考えるようにする。

【学んだこと・感想】

* 網谷

坂部さんのお話を聞いて、遊佐における子どもや若者の立ち位置が特徴的だと思った。遊佐では他の地域よりも子どもや若者が資源として捉えられているように見えた。坂部さんが遊佐に来たばかりの頃、遊佐のある子どもが、自分のことを知らない人であるにもかかわらず、挨拶をしてくれたことに驚いたそう。若い人が大人に対して恐怖感を抱いていない、無関心でない、

* 櫻田

* 望月

地域で活動する中で、大事にしなくてはいけない視点を再確認できた。お話を聞いていて、遊佐町全体で人とつながることが大切にされていることが伝わってきた。一人でできることは少なく、仲間とともに何かを作っていくことの楽しさや、大切さを実感した。遊佐町では、子どもが大人のことを、何でもできる人と認識しているという話を聞いて非常に驚いた。遊佐町で大人が子供を大切にしていることの表れだと思う。知らないことを大人に聞くと親切に教えてくれる環境が当たり前になっていけば、いろいろな人とのコミュニケーション能力が身につくと思った。その中で、自分の意見が何なのか気づき、他人の考えを大切にできるようになると思った。子どもに遊佐町のことを好きになってもらうだけでなく、大人たち自身が子どもが好きで遊佐町が好き、という環境が良い影響を与えていると思った。影響を与えるというよりも、伝染していく形の方が理想なのかなと感じ

【視察先】 すきまcafe

【場所】

〒113-0034 福島県郡山市大町1-2-23-W23

ブログ：子ども・若者居場所のブログ <https://kodomomirai-kooriyama.hatenablog.jp/>

twitter：@Cafe_sukima

【日時】 2019/2/28(木)

【視察メンバー】 網谷 櫻田 望月

【協力者】 ビーンズふくしま 小林

【視察目的】

- ・ 子ども若者の居場所支援の在り方を学ぶ
- ・ 居場所支援で大切にされている考え方を知る

【事業内容】

2018年2月22日にオープンした高校生のためのフリースペース。毎週木曜日の15：30～18：30の間に開かれている。ドリンクは無料で、本やゲームなど様々なものの利用や入退場は自由。来てくれている高校生の意見を取り入れて、様々な企画を行っている。スタッフは3人で、最低でも1人か2人は常駐している。駅前ということもあり、多くの高校生が訪れる日もある。